

本書シリーズの使い方

1 「3歳児のことはば」の位置づけと使用方法



健常3歳児は、約500語の語彙を習得後、それらの語彙を使用して、助詞が入った主語＋述語文（誰がどうする）等話をします。

「3歳児のことはば」は、健常3歳児の言語発達を参考にしていますので、生活年齢は3歳でも、言語発達が3歳未満の場合には、「3歳児のことはば」に入る前に、日常生活・玩具・写真・絵カード等で、語彙500語を獲得させ、それらを使って数語連鎖文が話せるようにする訓練が必要です。「3歳児のことはば」は、それらの指導の結果、自分で言葉を一方的に話すけれど、会話は全く成立しないというお子様に、非常に適しています。「3歳児のことはば」は、5W1Hの質問（何時、何処で、誰が、何を、どうやって、どうする）に回答するように作成されています。訓練開始時には、簡単な質問に回答することが出来なくても、毎回、質問に対する答えを教え、覚えさせることで、「3歳児のことはば」を1冊完了する頃には、お子様は、日常生活の中でも5W1Hの質問に回答することが出来るようになり、他人との基本的なコミュニケーションが成立するようになります。

2 「4歳児のことはば」の位置づけと使用方法



健常4歳児は、約1000語の語彙を獲得し、「コミュニケーションの道具」としてのことはばの能力を獲得しています。その基礎の上に、4歳代では、ことはばは自分の思いや意見を表現するための「思考の道具」になり、「言葉の内言化」が始まります。「4歳児のことはば」は、「思考の道具」としての言語能力の向上を目的として、作成しています。「4歳代」は、5歳代から本格的に始まる「言葉による思考の抽象化」学習の基礎作りの年齢です。言語発達遅滞があるお子様にとっては、日々、経験していることや感じていることを、言葉で的確に表現することは、実はとても難しいことです。「4歳児のことはば」で書いたことは、全て、お子様が日々経験していることですが、それを言葉で表現することは、容易ではないのです。「4歳児のことはば」は、それらの経験を、言語化させます（言葉で表現させる）。指導をしてみて、こんな言葉も知らないのかと、驚かれるお母様方が多いですが、ご自分で、ことはばを教えることで初めて解ることや新しく発見することが一杯あるのです。親子で自分の思いを言葉で伝えることの楽しさや難しさを体験して下さい。

3 「5歳児のことば」の位置づけと使用方法



健常5歳児は、約1600語の語彙を習得し、それらの語彙を使って、正しい発音（発音の完成）で複雑な文章表現が出来、特別に教えなくても、平仮名の文章を自分で読むようになります（平仮名の文字単語は、絵があると4歳後半には読むようになります）。これらの学習を通して、5歳代は「思考の道具」としての「ことばの内言化」が深まり、実物や絵が具体的に目前に無くても、言葉を聞いただけで、頭の中でイメージ出来（語想起能力の獲得）、質問されたことに対して、言葉を使って他人に分かるように、筋道を立てて話しをすることが出来るようになります。「5歳児のことば」は、これらの学習がお子様自身で出来るように、平仮名で5～6語文を中心に作成しました。一方、「言語学習は語彙学習である」と言っても過言ではなく、語彙学習は言語聴覚障害児では「最も困難な学習」です。一番苦手な語彙能力を伸ばすために「5歳児のことば」には、約1000語の新しい語彙を収録し、同じ意味の語彙を繰り返して使って覚えるように工夫しています。「3～4歳児のことば」でも語彙学習はしており、それらの語彙数を合わせると「5歳代」で獲得すべき1600語は、悠に習得可能です。経験的には「5歳児のことば」を完了後就学した場合、普通学級での1年生の学習は十分可能です。

4 「6歳児のことば」の位置づけと使用方法



健常6歳児は、約2100語～2300語の語彙を習得し、助詞の入った正しい日本語で大人と対等に会話出来ます。表現を変えると、健常6歳代は、日本語の話しことばの能力が完成する年齢です。その土台の上に、就学と共に、教科書を使った読み書き（文字言語）学習が始まります。「5歳児のことば」を学習後は、小学1～2年生の学習は普通学級で十分可能です。ただ、言葉を用いた思考力や学力の発達は、3年生以降、ますます高度なものとなります。過去に言語発達遅滞の既往を有する言語聴覚障害児では、「7歳頃」から始まる「論理的・抽象的思考」への移行がスムーズに出来ず、その結果、3年生以降の学習の高度化へもついて行けずに、学習障害や学業遅滞が顕在化するのです。これが所謂「9歳の壁」（生活年齢が9歳以上になっても言語や認知能力は9歳レベルで伸び悩む）現象です。これを予防するためには、「7歳頃」から始まる「論理的・抽象的思考」への移行がスムーズに出来るよう、6歳代で豊富な音声言語能力を培っておく必要があります。6歳代の音声言語能力が豊かであれば、その土台の上に形成される7歳以降の読解力や学力も年齢相応に伸び、「9歳の壁を打破」出来るのです。

「6歳児のことば」は、日本語の話しことばの学習の総仕上げに位置し、その後の言語や認知学習が年齢相応に行え、「9歳の壁」に

突き当たらないための土台作りをするものです。本書は、この意図で作成されています。

専門家の中には、「言葉は教えるものではなく、自然に育てるものだ」と、主張される方がおられます。それらの人々は私のように意図的に言葉を教えることには批判的ですが、重い難聴や言語発達遅滞を有するお子様に、全4冊の言語教育用絵本教材を用いて、丁寧に言葉を教えた結果、「9歳の壁」に突き当たらず、9歳以降も年齢相応な言語や認知能力を獲得し、専門職について、社会人として、立派に活躍している方々が、一杯おられます。この事実を年頭において全4冊をご使用下さい。

1) 「6歳児のことば」で対象とする生活年齢および障害

「6歳児のことば」は、基本的な言語能力が5歳レベルに到達している言語聴覚障害児者なら誰でも、実生活年齢に関係なく（実生活年齢が6歳～成人した方々）、幅広い年齢層で使用出来ます。

2) 本書を使用するための注意事項

(1) 本書は、週1～2回、1回40分～60分の言語訓練を、病院の外来で実施することを想定して、作成しています。毎回、きちんと訓練が実施されれば、週2回訓練する場合はほぼ半年、週1回訓練する場合はほぼ1年で、終了出来るように作成しています。

(2) 分厚い本書を、そのままお子様に呈示することは、お避け下さい。たちまちお子様に拒否されてしまいます。お子様の学習へのモチベーションを考慮し、1回の学習では1枚の絵を、絵カードとして使用することを、原則として下さい。その方が、はるかにお子様の心理的負担が軽く、学習への取り組みが容易となります。

本書には、切り取り易いように、ミシン目を入れています。ご使用に際しては、紙を強く引っ張って、ミシン目から、必ず1枚ずつ切り離して、ご使用下さい。強く引っ張れば切り取れます。

切り離れた絵や紙は、このままでは、ばらばらになりますので、ご使用後は、必ず、2穴のA4ファイルに綴じて、整理して下さい。

(3) 「6歳児のことば」では、情緒を育てるために、必要不可欠な日本や世界の昔話を全18話、取り入れました。多くの言語聴覚障害児では、物語文を1冊の本で読むと、情報量が多すぎて、一つの物語文を筋のある話として理解出来ないお子様が多いです。その経験から、「6歳児のことば」では、1枚のページに、6つの絵を絵巻物風に描きました。その方が、一つの物語を一目瞭然に平易に理解出来、簡潔に筋道を立てて物語の内容を覚えられるからです。経験に基づく工夫です。また、お子様の興味を引くため、今までの全3冊と違って、「6歳児のことば」は、1枚の絵に対応する形で、絵の横の隣のページに本文を書き、本を開くと絵と本文が対応して読めるように工夫しました。毎回、学習することが、意味のあるものとして理解出来るようになっています。ここは、今までの本と違う所です。その後は、今まで通り、数枚、質問応答や語彙説明を書いています。

(4) 6歳代は、カタカナに興味が出て来る年齢ですので、使用頻度の高いカタカナ言葉は、カタカナで表記しています。

(5) 「6歳児のことば」は、絵を見て、出来るだけ、親子で自由に会話することを楽しんでいただきたいと思います。

ただ、お母様方の中には、どうやって教えたら良いかわからないといわれる方がかなりあり、そうしたお母様方のために、質問に対する答えを、「キーワード」を羅列する形で、お示ししています。お子様方には、この「キーワード」を手掛かりに、正しい日本語で話をさせる練習をして下さい。

それでは、頑張ってください。

平成28年3月吉日 編著者 森 壽子（もり としこ）